

大拙の禅学における「靈覺」—「矛盾的自己」をめぐる問いとして

飯島 孝良

この度の発表では、大拙の思索における「靈覺」と「業繫苦」について特に焦点を当てる。大拙が今なお読者の目を惹くのは、その思索が「人生苦」＝「業繫苦」の凝視に基づくものである点に関わるように思われる。それはいわば、我々人間が合理的には解き明かせぬ「苦」を抱えて生きていかざるを得ないという認識であるとともに、その「苦」が如何に「靈覺」(「日本的靈性的自覺」)に裏打ちされたものかを探究するものであったといえる。

大拙自身が『靈性的日本の建設』(1946年)の述べるところによれば、「去年(昭和十九年)夏書いて、今年(昭和二十年)の春戦災を免れて、公刊になった拙著に、『日本的靈性』と云ふのがある。【中略】その後、どうもそれでは〔＝「日本的靈性」では：引用者注〕十分ならぬところがあるのに気がついて、今日では「日本的靈性的自覺」と云ふことにした」という。大拙によれば、「人生は苦である」という認識は、人間生活の事実をごまかさずに直視したことでもたらされるものであり、仏教者でもキリスト者でもその事実を認覚してそれから宗教経験へと向かい得るのだとも指摘する。それ故に、「業を業とまともに認覚すると同時に、吾等存在の根源そのものはそれで縛られてゐないと云ふことを自覚することです。即非の論理と云ふものがここで成立するのです」(『仏教の大意』1947年)とも述べる。ここに、「靈覺」に関する大拙の主たる論点があるのではないか—今回の発表において光を当てたいのは、こうした面である。

但し大拙は、苦悩というものは分別智によってもたらされるものであり、それを乗り越えるためには宗教経験の非合理性が求められるとする—知性的分別や合理性は、割りきれない矛盾を受け容れきれない—とも述べている。読者によっては、こういった大拙の記述に複雑さを感じ、少なからず当惑を覚え得ることは否めまい。大拙によれば、人間は生きていく限り往々にして「憂悩・恐怖に逼られて」しまい、それを知性で脱却しようとするが、そうした「分別的循環はやがて三界流転の本」になるという(前掲『仏教の大意』)。このように考える大拙は、容易に拭い去り難い「業繫苦」という現実を直視し続けて乗り越えようとする本来の感覚として「靈覺」を据えようとしたのではないか。そうした絶え間ない動性の如き在り方を探究し把握しようと考え、大拙はこれを「靈性」という理念的で^{スタティック}静的な在り方として定義するのでは納得しきれず、「靈覺」という経験(心理)的^{ダイナミック}で動的な在り方として定義することに改めたのではないか—このような考察を裏付けるために、1940年代における大拙の思索を、その禅思想史観と照らし合わせながら追跡する。

そうした大拙の「靈覺」の特徴と、西田哲学の所謂「絶対矛盾的自己同一」とどのような点で共通しどのような点で異なるのか、やはり関心は已まないところである。或いはまた、我々が「禅文化」を捉えなおす際に、大拙の独特な視座はどのように活かし得るのかについても、今日的な視座から検討が求められていると感じられる。日本思想史上の双璧が生誕 150 年を迎えた記念すべき本年に、御列席の諸氏と一層の学びを頂戴できれば有難く考えている。